

『為忠家後度百首』の行事題詠―故事・古礼・起源を詠む歌

家 永 香 織

〈要 約〉

平安後期成立の百首歌『為忠家後度百首』の行事題詠における、故事・古礼・起源を詠むという特徴について論じた。

本百首には、①様々な文献に典拠を求め、行事にまつわる故事や、行事の古礼や起源を意識的に詠む、②「いにしへ」などの漠然とした表現ではなく、「占手」「白き麻の紙」「吉野の宮」などの語を用いて、古礼・始原であることを具体的かつ明確に示す、③近い過去ではなく遙かに遡った時代の行事の在り方を、時に推測に基づきながら詠む、という特色がある。一方、後代の『六百番歌合』や『正治二年院第二度百首(正治後度百首)』に見られるような、聖代への憧憬や復古の思想は読み取れない。

そうした特色の生まれた要因として、①年中行事への関心が高まっていた時代背景、②行事題において古礼や起源を詠むことは原初的な題詠方法と言えること、③漢詩文の影響、④行事次第に対する歌学的関心という四点が指摘できる。

〈キーワード〉

院政期和歌・百首歌・『為忠家後度百首』・行事題・題詠

はじめに

『為忠家後度百首』(以下、『後度百首』と略称する)は、藤原為忠が『為忠家初度百首』に続いて主催した二度目の百題百首で、為忠と三人の子息(為業・為盛・為経)、藤原親隆、同頭広(後の俊成)、源仲正・頼政父子といった一族知友八人を作作者とする私的な催しである。成立は長承三年(一一三四)末から翌保延元年頃と見られる。

為忠による二度の百首は、いずれも設題に特徴があり、本稿で検討対象とする『後度百首』雑部は行事・遊戯関連の歌題十五題から成る。十五の歌題は、以下に整理したように、雑部の中に更に四季・雑部を有するかのよう構成となっている。

春—卯杖・蹴鞠・闘鶏	夏—神祭・賀茂祭・騎射
秋—乞巧奠・相撲節・小鷹狩	冬—射場始・五節・臨時祭
雑—庚申・競馬・囲碁	

これほどの数の行事題が一度に出題されたことは和歌史上初と思われ、十五題中十題は先行例が見出せない。本意の確立していない歌題が多いという事象は、各々の歌題の詠出方法にも作用し、当百首の行事題詠の詠み方には顕著な特徴が見られる。第一に行事次第を具体的写実的に描写する、第二に行事に関わる故事・古礼・起源を詠む、という特徴である。第一については、既に考察を行った^②。本稿では第二の特徴について論じたい。^③

一 故事・伝承を詠む

まず最初に、歌題とされた行事に関連する故事や伝承を詠んだ歌から見ていこう。『後度百首』の行事題では様々な故事が詠まれているが、和歌において多数の先行例があるような著名なものは多くない。中では、次にあげるいわゆる爛柯の故事が最もよく知られたものと言えよう^④。か。^⑤

①やまびとのをのゝくちしいにしへも かくおもしろきてをやめでけん (囲碁・七九一・為忠)

②いにしへのをのゝくちしことわざに けふもこゝろをうちつくしつる (同・七九二・親隆)

『述異記』などに見える爛柯の故事は、『俊頼髓脳』に記されるほか、囲碁に関わる和歌に詠まれた先行例がある。

つくしに侍りける時にまかりかよひつつごうちける人のもとに、京にかへりまうできてつかはしける

きのとものり

a ふるさとは見しごとくもあらずをのえの くちし所ぞこひしかりける (古今集・雑下・九九一)

ごうちたるに

b をのえのくつばかりにはあらねども かへりみだにもみる人のなき (伊勢集・一七四)

実際に囲碁を打っている状況で詠まれたこれらの和歌のほか、漢詩に

も用例があり、「囲碁」^⑥題で爛柯の故事を詠む方法は、定石と言ってよいだろう。

一方、珍しい故事を詠んだ例として、以下のような歌がある。

③からしふくこがねうつぢのはねおもに かしふせごをもつきてけるかな
(闘鶏・六九六・親隆)

④おぼつかないづれのとりかかけにけん あこねのかねとはねのからしと
(同・七〇一・為経)

傍線部は、魯の季平子と邱昭伯が闘鶏を行った際、季平子は鶏の羽に辛子を塗り、邱昭伯は鶏の蹴爪(あしづめ) (距とも言う)に金具をかぶせたという、『左子伝』(昭公二十五年)に見える故事に基づく。^⑧

⑤をしへをきてせきよりにしにのがれにし あとたづぬとてよをあかしつる
(庚申・七七七・顕広)

『史記』(列伝・老子伝)に記される老子出関の逸話に基づく歌である。^⑨ 庚申は道教の説く「三戸説」^⑩に由来するため、「庚申」題で老子の逸話が詠まれたのであろう。

⑥うまをうしといひけるひとゝともなひて とらのときまでよぞとほしつる
(庚申・七七八・仲正)

この歌は、『俊頼髄脳』に記載された逸話を下敷きにしており、「馬を牛といひける人」とは孔子を指す。老子の逸話が詠まれていた⑤に対して、こちらは孔子の逸話ということになる。由来は未詳であるが、『水左記』(永保元年二月三日条)^⑫などにより、庚申の日には孔子影供が行われることがあったと知られる。仲正は、庚申に縁のある孔子の逸話を取り入れ、「馬」「牛」「寅(虎)」と動物尽くしにすることを意図したの

であろう。

⑦おもふことかなひやするとみとせまで ほしあひのそらをまつりつるかな
(乞巧奠・七三三・為経)

これは中国由来の伝承を詠んだ歌である。『年中行事秘抄』に見える中国唐代の書『金谷園記』からの引用によれば、七月七日に一つのことを願えば三年で叶うという。^⑬ ⑦の上句はこの伝承を背景とするのであろう。但し、『年中行事秘抄』は後代の書であり、為経が拠った資料は未詳である。

⑧あやめふくさつきのゆみをいにしへは ながらのもりへみにぞゆきける
(騎射・七二二・仲正)

第三句以下は、長柄社で「馬的」^{うまゆみ}が行われたという『日本書紀』(天武天皇九年)の記事に基づくと思われる。^⑭ 天智七年(六六八)及び八年五月五日には天皇を中心とした狩獵が行われているが、五月五日の騎射が恒例化するのには八世紀に入ってからである。^⑮ おそらく仲正は、宮中儀礼として確立する前段階の騎射に思いを馳せるという意図で長柄社の「馬的」を詠んだのであろう。

③から⑧までは、従来ほとんど注目されず、⑥の孔子の逸話を除けば和歌に採り入れられたことのない故事や伝承を詠んだ例であった。闘鶏・乞巧奠・騎射は、現在知られる範囲では初めて歌題化された行事であり、庚申も歌題となった例は稀で、ほとんどの場合は隠題として詠まれる。本意の確立していない歌題を詠むにあたり、作者たちが行事にまつわる故事を博搜している様が看取できよう。

二 故実・古礼を詠む

続いて、歌題となった行事に関わる故実や古礼を詠んだ例を検討したい。まずは、「相撲節」題の二首から取り上げよう。

① いつしかとうらてにいでゝうてぬれば はつかしげなるゆふがほ
のほな (相撲節・七四〇・為盛)

② とりものにかほはかくれてみえわかず いづるうらてはたれにか
あるらん (同・七四一・頼政)

相撲節は、八世紀に七月七日の宮廷行事として慣例化し、計二十番の取組が一番が占手、二番が垂髪、三番が総角、四番以降は普通の相撲人、最後が最手と定められていた。しかし九世紀末以降、相撲節の形式は変化し、占手相撲は省略され相撲人のみでの十七番の取組となっていた。⁽¹⁶⁾『後度百首』成立時には相撲節自体が断絶していたのだが、為盛と頼政は、九世紀末に変容する以前の、本来の相撲節の様を想像して詠んでいるのである。これは注目すべき特徴と言える。

こうした儀式本来の在り方、古礼・古態を詠んだ例を、他にも取り上げてみよう。

③ しろひあさのかみつみあぐるこよひこそ さひたはぶれのねであ
かしつれ (庚申・七七六・親隆)

第四句の「さいたはぶれ」は「采戯れ」であり、攤を打つ意と思われる。攤とは、筒に入れた采を振り出して出た目の多寡を競う遊戯で、庚申・産養・移徙の折によく行われた。『新儀式』・『小右記』(寛弘五年九

月十五日条)他に、打攤を「擲采之戯」と称した文言があり、これを和歌にふさわしく「采戯れ」と表現したのである。種々の文献により、打攤では紙が賭物とされたことが知られる。したがって、初句の「しろひ」は「しろき」の誤りで、「しろきあさのかみ」は攤の賭物としての白麻紙を意味すると考えてよからう。⁽¹⁷⁾

それでは、攤の賭物に白麻紙が用いられることが実際にあったのであろうか。平安時代の記録類において攤の賭物の紙の種類が明記された例を幾つかあげてみる。

a 数献後置紙、公紙甚依下品、給陸奥紙、上達・殿上人有攤事(『御堂関白記』寛弘六年十二月二日条裏書)

b 攤紙置色々薄様、例事也(『御産部類記』所引『為房卿記』康和五年正月二十四日条)

c 献碁手帋(公卿居高坏、加白薄様)(『永昌記(為隆卿記)』天治元年六月一日条)

d 供御料紙(別納所調進之、薄様五帖・上紙廿帖、積折敷、以白組糸結之、居士高坏)(『兵範記』仁安二年正月四日条)

合わせて、『宇津保物語』(あて宮)の庚申の場面も見ておきたい。

e 碁手に、銭三十貫、紙、筆、机に積みて、色々の色紙積みて十高坏、蘇枋の机に、壇の紙、青紙、松紙、筆など積みて、碁手にしたり。

f 碁手に銭二十貫出だしたまへり。なまめきてしたまへり。青き透箱に、陸奥国紙、青紙など積みて出だしたまへり。

eは、あて宮が庚申にあたり殿上の間に贈った物、fは兼雅の大君が同じく殿上の間に贈った物を示す。「碁手」とは本来は囲碁の賭物であ

るが、禄として配られる場合もあり、また攤の賭物を指すこともある。

『うつほ物語』では庚申に攤を打つ様も描かれるが、e・fに示した紙類は直接に打攤の賭物とされているわけではない。それでも、碁手という名目で贈られた紙の種類を知ることができる。

これらの文献、特にbに「薄様」「例事」とあるのに注目すれば、平安中期以降は薄様を用いるのが一般的であったと言えようか。⁽¹⁸⁾ 麻紙を用いた例は、全く見出せていない。

そもそも麻紙が盛んに作られたのは主に奈良時代であり、『延喜式』によれば、当時まだ麻紙が製されていたことがわかるが、次第に廃れてゆく。一方、攤の実施を示す最古の例は、『大鏡』（第三巻・師輔）における天暦三、四年頃の庚申の記事や、『新儀式』（四・御庚申事）であり、平安初期の実施例は知られない。しかも打攤の賭物は、はじめは紙ではなく銭であつたらしい。『西宮記』（御庚申）に「置御料銭供御菓子、有仰有集攤へ打高簍者候御前、最後打高目者取銭、打破時又始打也」とあることからそれがわかる。麻紙と攤それぞれの歴史を勘案すると、攤の賭物として白麻紙が使用されるのが通例だった可能性は高くはなさそうである。

更に言えば、平安中期に守庚申の内容に変容が生じ、庚申の打攤の例は記録に見られなくなり、詩歌会が中心となる。『後度百首』成立当時、既に庚申の打攤自体あまり行われなくなっていると思われる。⁽¹⁹⁾

おそらく③歌の作者親隆には、攤の賭物がはじめ銭であつたという知識はなかったであろう。

・現在ほとんど行われていないが、かつては庚申に紙を賭物として

攤が行われた。

・現在ほとんど製作されていないが、かつては白麻紙が使用されていた。

この二点の認識を結び付けることにより、庚申の打攤が恒例となった初期の様相が描けると考えたのであろう。⁽²⁰⁾ つまり、自己の知識を総動員しつつ、庚申の古礼を詠もうとしたのが③の歌なのである。

①から③の例により、作者たちが故実・古礼を詠むことを積極的に志向していることがわかった。その事実を念頭に置きながら、次の歌を検討したい。

④ ひかげぐさはなのいろくむすびもて はつうのつゑをいはひつ
けつる (卯杖・六八〇・親隆)

卯杖は、邪気を払うものとして正月上卯の日に大学寮や諸衛府から天皇・后・東宮らに献上され、また一般にも贈答された。桃・椿・柏・梅などの木を五尺三寸に切り、何本かず束としたものである。⁽²¹⁾ ④において親隆は、ひかげ草など様々な花を結び付けたと詠んでいるが、卯杖について詳述する『延喜式』『西宮記』『江家次第』などを参照しても、卯杖に花を飾った例は知られない。一方、同じ日に同じ目的で献上・贈答されるものとして卯槌がある。こちらは桃の木を用いて角柱または円筒状にしたものに五色の糸を垂らす。『枕草子』と『源氏物語』から参考となる記述を引いてみよう。

五寸ばかりなる卯槌ふたつを、卯杖のさまに、頭などをつゝみて、
山橘、ひかげ、山すげなどうつくしげにかざりて

(『枕草子』八三段)

卯槌をかしう、つれぐなりける人のしわざと見えたり。またぶりに、山橘つくりて貫き添へたる枝に

まだふりぬ物にはあれど君がため深き心にまつと知らなん

(『源氏物語』浮舟)

『源氏物語』は、浮舟が中君の若君のために、作り物の小松に山橘を付けたものを卯槌に添えて贈った場面である。これを参考にすれば、『枕草子』の方も「山橘、ひかげ、山すげ」は卯槌に飾られていた乃至は添えられていたものと思われる。

④の歌に「ひかげぐさはなのいろくむすびもて」とあるのは、『枕草子』の影響であろう。親隆は、『枕草子』の記述を「卯杖のように山橘やひかげ、山菅を飾った」と解釈し、それが卯杖の贈答の古礼だと考えたのではないか。③の白麻紙の例と同様に、実例を体験的に知っているわけではないものの、故実・古礼だと推量した儀式的様相を詠もうとしているのである。

三 起源を詠む

前節で検討した故実・古礼への志向と通底するのが、儀式・行事の起源に思いを致す詠み方である。

①はつはるのはつうのつゑをたてそめて
いくよになりぬかすのみ
やつゑ (卯杖・六七九・為忠)

②よろづよのむらのきしもきゝりそめて
いろどるつゑのひさしか
るらん (同・六八三・為業)

③いかにしてひかげのいとをとりそへて ちとせのうづゑたてそめてけん (同・六八四・為盛)

これら三首は「卯杖」題の歌である。『皇太神宮儀式帳』によれば、伊勢神宮でも卯杖が作られ神前に供えられており、①の第五句「かすのみやつゑ」は、おそらく「かみのみやつこ(神の御奴)」の誤写であろう。①から③は、いずれも「……そめて」という表現を用いて卯杖が初めて作られた時点を想起し、その後の悠久の時間を詠んでいる。卯杖は悪鬼を払うもの、すなわち長寿につながるものであるから、こうした詠み方がされるのはごく自然であるとも言えよう。しかし、行事の起源に思いを馳せる歌は、他の歌題にも見られる。

④くものうへにいつたびふりしそでをみて よしのゝみやのことをしぞおもふ (五節・七六五・為経)

⑤いりひさすよしのゝみやのことのねに そでふりそめしあまつおとめ (同・七六六・頼政)

この二首は、吉野宮で神女が袖を五回翻して舞ったのが五節の起源であるという『江家次第』(巻十・五節帳台試)に見える起源説を典拠として詠まれている。

「五節」は『永久百首』の歌題の一つであり、五節の折に詠まれた歌は「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよ をとめのすがたしばしとどめむ」(古今集・雜上・八七二・良岑宗貞)をはじめとして夥しい数に上る。しかしながら、『後度百首』以前に吉野宮の故事を明確に取り入れた例は管見に入っていない。多くの先行例があり様々な詠み方が可能な「五節」題において、敢えてその起源を詠もうとしている点は注意すべきで

あろう。

⑥うどはまのなみのおとをばたつれども なほしづかなるかものみ
たらし
(臨時祭・七七四・頼政)

最後にあげるのは賀茂臨時祭を詠む歌である。有度浜は駿河舞発祥の地とされる。⁽²³⁾ 結句に「かものみたらし」とあることで賀茂臨時祭を詠んだことが示され、題意は満たされているが、駿河舞は賀茂臨時祭特有のものではない。それにもかかわらず駿河舞発祥の地である有度浜を詠み込んだのは、やはり起源に対する強い関心、起源を詠もうという志向によるものと考えたい。

さて、ここまで行事や儀式の故実・古礼・起源を詠んだ歌の例を検討してきたが、改めて確認しておきたいのが、『後度百首』成立当時のこれらの行事や儀式の実態である。十五の歌題のうち、『後度百首』成立時には全く実施されていなかったのは、相撲節である。相撲節は、延暦十二年(七九三)以前に宮廷行事として恒例化したが、一時断絶し再興され、承安四年(一一七四)を最後に廃絶する。⁽²⁴⁾ 『後度百首』成立当時は断絶期に相当する。

また、宮廷行事として確立した当初とは変容していたのが、騎射と庚申である。騎射は、本来五月五日の端午節会の催しであったが、節会は安和元年(九六八)に村上天皇の国忌を理由に廃絶する。⁽²⁵⁾ 以後、騎射は近衛府の行事である荒手結・真手結として続けられるのであり、『後度百首』成立時も五月の騎射自体は実施されている。庚申は、『新儀式』や『西宮記』には打攤を行うことが明記されているが、平安中期以降、

庚申の打攤の記録は見えなくなる。

つまり、宮廷行事の前段階の騎射を詠む第一節⑧、相撲節が変容する以前の占手相撲を詠む第二節①②、白麻紙を賭けた庚申の打攤を詠む第二節③は、詠歌時点から見た近い過去の様相を詠むのではなく、更に遡り、行事の始原に近い時代のあり様を表現しようとしているのである。

四 他作品の行事題詠との比較

『後度百首』における行事題詠の特徴が明らかになったところで、他の作品に目を転じてみたい。まず、『後度百首』以前の行事題の特徴を見ておこう。『平安和歌歌題索引』⁽²⁶⁾を参考に、行事題で詠まれた先行和歌を調査した。典型と見なせる例を以下にあげてみる。

a ひととせにこよひばかりぞあまのがは こひつつわたるせをすぐし
てよ
(元真集・「七月七日」・一四六)

b 春ごとに君がねのびをかぞふれば やがて小松のよはひなりけり
(能因法師集・「子日」・二二五)

c けふごとに軒のつまなるあやめぐさ たなばたつめにおとらざりけり
(公任集・「五月五日」・八〇)

d もものはなひかりをそふるさかつきは めぐるながれにまかせてぞ
みる
(江帥集・「曲水宴」・四四)

傍線を付したように、行事が行われる季節や行事にゆかりのある自然の景物や雅語、あるいは人々が共感できる心情を詠み込みながら歌題を詠出しようとしており、行事そのものの作法や歴史が主題になってはい

ない。逆に言えば、雅な景物や歌ことばと結び付きやすく、優美な詠み方が可能な行事のみが歌題化されてきたと考えられるのではないだろうか。闘鶏も相撲節も平安前期には既に行われていたが、『後度百首』に至るまで歌題として採用された例が知られないのは、行事の性格によるのであろう。

行事にちなむ景物や雅語を取り入れて詠みなすという方法は、『後度百首』の約二十年前に催され、行事題を多く含む『永久百首』においても変わることなく、

e はるたてばあづさのま弓引きつれて みかきの内にまとぬをぞする

(賭弓・三六・源顕仲)

f をとこ山みねのさくらにもろ人の かざしの花をたぐへてぞみる

(石清水臨時祭・五四・源兼昌)

といった歌が詠まれた。

一方で『永久百首』には、『後度百首』の方法に近い作も数は少ないながら見出だすことができる。

g みかさ山ふりにし代よりあめのした たなびきてまつるけふにぞ有

りける (春日祭・四九・大進)

h をとめ子が袖ふりそめしをみ衣 とよのあかりにたえせざりけり

(五節・三六六・藤原仲実)

これらは、その行事が古くより絶えることなく続いている様を詠むという点で、第三節の「卯杖」題の歌に近い。しかしながら、gの「ふりにし代」は漠然としており、具体的に始原の時を表しているとは言い難い。またhも、第三節の「五節」題詠のように具体的な起源説を明確に

詠出しているわけではない。これらと比較すると、『後度百首』では古礼にしても起源にしても、具体的かつ明確に示されている点が独特であるとわかる。

続いて、歌題のみ与えられる純粋な題詠とは異なるが、屏風歌の例も検討しておこう。行事や儀式を題材とした屏風歌を粗々調査したところ、『後度百首』と共通する詠み方が見られる例は、やはり多くない。

i ゆふだすき千年をかけて足曳の 山ぬの色はかはらざりけり

(貫之集・右衛門督屏風・「十一月臨時の祭」・四〇九)

j よろづよをかけていのればゆふだすき かみのまつりはたえじとぞ

おもふ(元輔集(二類本)・皇太后宮裳着屏風・「かみまつり」・六)

k 神よりいはひそめてしあしひきの やまのさかきば色もかはらず

(道濟集・「十一月、神まつりする家」・八五)⁽²⁸⁾

iとjはいずれもその行事が長く不変であることを詠むが、起源まで明確に視野にいれてはいない。kのみは「いはひそめてし」という表現で起源を詠んでおり、第三節で取り上げた例と通底する面がある。ただし、第三節④⑤⑥のような文献に記された起源説に基づき詠み方とは異なる。

こうして先行する行事題詠と比較すると、『後度百首』の以下のような性格が、極めて独自性のあるものと理解される。

・様々な文献に典拠を求め、意識的に故事・古礼・起源を詠む。

・「いにしへ」などの漠然とした表現ではなく、「占手」「白き麻の紙」

「吉野の宮」などの語を用いて古礼・起源であることを具体的かつ明確に示す。

・近い過去ではなく遙かに遡った時代の行事の在り方を、時に推測に基づきながら詠む。

それでは、『後度百首』以降の行事題詠にはこうした特色は見出せるのだろうか。『後度百首』以後、行事題がまとまって出題された作品として、『六百番歌合』『正治二年院第二度百首』（以下、『正治後度百首』と略称する）があげられる。前稿で論じたように、これらの作品には、行事次第の具体的写実的描写という『後度百首』と同様の特徴が看取できたが、故事・古礼・起源を詠む点でもまた、共通する側面がある。特に重要な例を選んで引いてみよう。まず成立順は前後するが、『正治後度百首』『公事』題の歌から見ておきたい。

l 明けそめしあまのいはとの昔より 雲ぬに絶えぬあかほしのこゑ

（五九五・源家長）

m あかほしの雲ぬにすめるこゑにてぞ あまのとあけし昔をばしる

（九九二・越前）

n 雲のうへのをとめのすがたみるをりぞ よしのの宮も面かげにたつ

（八九三・宮内卿）

l と m は内侍所の御神楽、n は五節を題材とし、いずれも行事の起源を詠んでいる。素戔男尊の暴挙に怒った天照大神が天岩戸に籠もった折、岩戸を開けさせるために舞った天鈿女命の舞が神楽の起源とされ、l と m はこれを踏まえる。また n は、第三節④⑤の歌の典拠にもなっていた五節の起源説を詠む。これらは「あまのいはと（あまのと）」「よしのの宮」の語により、行事の起源を明確に示している点、『後度百首』

と同工と言える。

このように『後度百首』と同じ方法の作が見出せる一方で、近似する性格を有するものの決定的な相違点のある例も見られる。『六百番歌合』の次の歌に注目したい。

o けふはわれきみがみまへにとるふみの さしてかたよるあづさゆみ

かな

（六百番歌合・賭射・四九・藤原良経）

判者藤原俊成が「左歌、奏文杖にさす心、をかくし見え侍り」と述べているように、良経が詠んだのは、近衛大将が射手の姓名を天皇に奏上するために射手奏を文杖に挿す情景である。この歌については、谷知子による詳細な論考がある。⁽²⁹⁾氏は、当時途絶していた賭射がもし行われていたら、近衛大将である良経自身が果たすはずであった射手奏の役割を、歌の中で描いていること、判者俊成は、行事の故実を歌に反映させた点を評価していることを指摘する。現実には体験していない行事の故実を想像で詠んでいる点は、第二節で言及した歌々と共通する。ただし、良経は想像上の儀式において主要な役割を担っているが、『後度百首』作者はそうではなかった。これは両者の身分・立場を考慮すれば当然ではあるが、重要な差異と見なすべきであろう。

p はしたかをふるきためしにひきすゑて あとある野べのみゆきなり

けり

（六百番歌合・野行幸・五三一・藤原有家）

q かりころもおどろのみちもたちかへり うちちるゆきの野かぜさむ

けし

（同・五三五・藤原定家）

r せり河のなみもむかしにたちかへり みゆきたえせぬさがのやまか
ぜ
（同・五三九・藤原良経）

賭射同様、当時は途絶えていた野行幸を詠んだ歌で、これについても谷知子が言及している。⁽³⁰⁾『六百番歌合』『野行幸』題では、傍線部のような古い先例を示す表現が頻出する。その点では、『後度百首』に見られる古礼・起源への志向と近似するように見える。しかしながら『六百番歌合』作者は、あたかも野行幸が古礼に沿って復活し、自分たちが後鳥羽天皇に供奉しているかのような詠み方をしている。「絶えて久しい天皇主催の鷹狩行幸が題として設けられた背景には、秩序への願望があったのではないだろうか」⁽³¹⁾という谷の指摘は重要であろう。廃絶された伝統的儀式を復活させ、聖代とされた時代の秩序を取り戻すべきだという視点は、『後度百首』には見られない。

この後、讓位した後鳥羽院は狩獵に熱中するようになるが、谷は「こうした後鳥羽院の方向性が、摂関家の発するメッセージと結果的に一致していることは興味深い」⁽³²⁾と述べており、共感される。先に検討した賭射の場合、『六百番歌合』の数年後、良経父兼実が後鳥羽天皇に強く願ひ出て、一時的にはあるが行事が復活した。摂関家は、途絶した行事を歌合の歌題として設定し、復活の願いを込めた歌を詠むばかりか、実際の行事復活に関与することができるのである。これは『後度百首』作者たちにはとうてい望み得ないことであろうし、そもそも彼等には行事を復活させ古礼を再現すべきだという意識もなかったと思われる。

『後度百首』作者のうち、最も高位にある為忠でさえ正四位下であり、頼政は叙爵前、他はいずれも五位で、為盛・頼政は散位である。例えば宮中における庚申の打攤が復活したとしても、ほとんどの者は臨席すらできないのではないだろうか。無論、伝統の復活を望む思いは身分に無

関係である。また、作者たちの胸中に、古式に則った儀式に連なる自己の姿を空想する意識はあったであろう。しかし『後度百首』には、p、rの歌や『正治後度百首』の、

s 昔よりたづねし跡もおほ井川 もみぢの錦をりにあひつつ

(宴遊・三九三・源具親)

t しら川の花にみゆきの跡とへば 老木の桜ねにかへりつつ

(同・五八七・源家長)

u 行すゑも思ひいである跡なれや みゆきふりにしみ芳の滝

(同・八八七・宮内卿)

などのような、聖代への憧憬や復古の思想が明確に読み取れる歌は、一首として見当たらないのである。

それは、『後度百首』行事題詠における天皇家に対する祝意が、『六百番歌合』や『正治後度百首』に比して極めて弱いこととも関連するであろう。⁽³³⁾

さいごに

『後度百首』の行事題詠を具体的に検討し、他作品とも比較する中で、その独自性が明確になった。『後度百首』作者は、様々な文献を参照しながら積極的に、かつ明確な形で故事・古礼・起源を詠み、時には推測を交えつつ行事の古態を描こうとしていた。しかしながら新古今時代の行事題詠に見られるような聖代への回帰の志向や天皇家への祝意は、ほとんど看取することができない。

ならば、なぜ『後度百首』作者は、行事に関わる故事や儀式の古態を詠んだのであろう。まず第一に指摘すべきは、この時代に見られる年中行事への関心、すなわち時代的風潮という要因である。院政期には、『江家年中行事』『師遠年中行事』『師元年中行事』など様々な年中行事書が作成・書写された。⁽³⁴⁾『永久百首』に十を超える行事題が設けられたのも、

『後度百首』雑部が行事題でまとめられ、行事の在り方そのものに強い関心が向けられているのも、こうした時代背景に拠るものと思われる。

但し『後度百首』には、「蹴鞠」「囲碁」など厳密には行事と言えない題や、「闘鶏」「小鷹狩」「庚申」など年中行事書に見えない題が含まれる。また第四節で述べたように、『後度百首』の行事題の詠み方は、同時代

までの他の行事題詠と大きく異なる特徴があった。時代背景のみでは説明しきれない部分がある。

『後度百首』の行事題の独自性は、題詠の方法と関わるのではないだろうか。前稿において、儀式次第の具体的写実的描写という方法がとられている要因として、そうした詠み方が行事題を詠む場合の原初的方法であるからだと述べたが、故事・古礼・起源を詠む方法についても、同様の指摘をしたい。すなわち、定型となるような詠み方が定まっていなかった行事題において、それが本来のどのような行事だったかという古礼や起源を詠むこともまた、原初的な行事題詠の方法と言えると思うのである。

同時に、漢詩文との関連も考慮すべきであろう。故事や起源を題材として行事を詠む手法は、漢詩文に例が多い。⁽³⁵⁾『為忠家兩度百首』には、句題詩の手法に倣い、故事や古歌を利用することで題の文字を間接的に

表現した(題を「まはして」詠んだ)歌が見られるが、それと同様、行事題の詠み方も漢詩文の手法の影響が想定できる。⁽³⁶⁾

更に、行事次第に関する歌学的関心も重要な要因であろう。佐藤明浩が指摘するように、歌学書を継ぎ、その注説を実作に取り入れるなど、⁽³⁷⁾

『為忠家兩度百首』の作歌態度からは歌学と実作の密接な関わりが看取できる。作者たちは、歌学書所載の歌語に関する注説を取り入れるのと同じ意識で、様々な書から故事や逸話を取り入れたのではないだろうか。『後度百首』に見られる行事の起源や故実への関心は、歌語に対する歌学的興味と重なり合うものであろう。

以上、四点の要因を指摘したが、『後度百首』に見られる行事題の詠み方が原初的方法だとするならば、先行する行事題詠に同様の方法が見られないのは不審であるという反論が予想される。そこで、先行作品と『後度百首』の方法の差異について、更に付言しておきたい。

第四節で示したように、『後度百首』以前の行事題は、行事そのものの具体的作法や歴史よりも、行事にちなんだ自然の景物や雅な歌ことば、あるいは誰もが共感できる心情を詠む方法が主流であった。

題詠とは、題として与えられた事物の本意を詠むことである。本意とはその事物の本性だが、詠歌の実態に即して言えば、和歌の伝統の中で共通認識となった各々の事物の美的特質が本意と見なせる。自然の景物と違って、行事題の多くは行事そのものの美的特質が見出しにくい。そうした中で、従来はその行事に関連する美麗な景物や典雅なことを添えることにより、優美さを損なわぬようにしながら行事題が詠まれてきた。しかし『後度百首』作者たちは、行事次第の具体的様相や、古礼・

起源を詠むという方向に向かった。これらは行事の実態であり本性と認められるので、題となった事物そのものの本性を詠むという意味で、題詠の原初的方法と見なせるのである。

『後度百首』作者たちは、どのような歌題であっても伝統的美意識の範疇で詠むという従来の和歌観に必ずしも拘泥しない。⁽³⁸⁾行事題の詠み方からは、『後度百首』作者たちの題詠に対する基本姿勢までもが見て取れるのである。

注

(1) 「蹴鞠」「囲碁」など厳密には行事と言えない題も含まれるが、便宜上まとめ「行事題」と称する。

(2) 拙稿『為忠家後度百首』の行事題詠―具体的写実的描写について―『国語と国文学』八八―九、二〇一・九。拙著『転換期の和歌表現 院政期和歌文学の研究』(青簡舎、二〇一二)所収。本稿で「前稿」という場合、すべてこの論を指す。

(3) 以下に取り上げる『後度百首』の歌の解釈や典拠については、拙著『為忠家後度百首全釈』(風間書房、二〇一一)で詳述した。合わせて参照されたい。本論では同書との重複を避けるため、注として同書(『全釈』と略記)の対応する頁を示し「P〇〇参照」と記した。やむを得ず同様の記述を行う際には、やはり注に同書の頁を示し「P〇〇。」と記した。

(4) 『全釈』P五五五参照。

(5) 以下、論述の都合上、『後度百首』からの引用歌には節毎の通し番号、他作品からの引用歌にはアルファベットを振り、必要に応じて傍線を付し

た。『為忠家後度百首』本文は尊経閣文庫本を底本とし、底本に明らかな誤りがある場合は他本により校訂した。仮名遣いが歴史的仮名遣いと異なる場合は、歴史的仮名遣いを()に入れて傍記した。他の引用は以下の通り。和歌―『新編国歌大観』。『年中行事秘抄』。『内裏式』。『皇大神宮儀式帳』―群書類従。『日本書紀』。『宇津保物語』。『枕草子』。『源氏物語』―新編日本古典文学全集。『御堂関白記』―大日本古記録。『水左記』。『永昌記』。『兵範記』―増補史料大成。『御産部類記』。『仙洞御移徙部類記』―図書寮叢刊。『西宮記』。『江家次第』―新訂増補故実叢書。漢文の割書はへゝに入れて示した。また、句点を補った場合がある。

(6) 『菅家文章』(巻五・「囲碁」)など。

(7) 諸本とも「あこね」。宮内庁書陵部蔵(一五四・三四)本及び群書類従本は、「ね」の右傍に「え敷」とある。「あこえ(あこえ)」の誤りであろう。

(8) 『全釈』P四八五。

(9) 『全釈』P五四五参照。

(10) 人の体内には三戸(三種の虫)があり、庚申の日に人が眠ると体内から抜け出し、天帝にその人の罪惡を告げに行くという。

(11) 『全釈』P五四五参照。

(12) 「三日庚申 今夜奠先聖、故殿御時毎庚申有此事、予相次欲奉奠之処、心事依違、于今緩懈、仍今夜初所企也」。

(13) 『全釈』P五一参照。

(14) 『全釈』P五〇三参照。

(15) 大日方克己『古代国家と年中行事』講談社、二〇〇八、P九七―九九。

(16) 新田一郎『相撲の歴史』講談社、二〇一〇、P八八―九一。なお『後度百首』と同時代に成立した藤原基俊撰『相撲立詩歌合』は古式相撲の形式を模し

ており、一番は「占手」とされる。

(17) 『全釈』 P 五四四。

(18) 『仙洞御移徙部類記』を通覧すると鎌倉期も薄様の例が多い。

(19) 但し、室町期には庚申に雙六や乱碁を行っている例が見られる(『看聞日記』他)。また産養や移徙の際の儀礼的打攤は一貫して行われている。

(20) 拙著(2) P 一二二では「わざわざ「白き麻の紙」と詠んでいるのは、親隆がそうした例を知っていたからであろう」と述べたが、親隆は庚申の打攤の古い形態を想像して詠んだのだと考えを改めたい。

(21) 『全釈』 P 四七二―四七三。

(22) 『全釈』 P 五三五参照。

(23) 『全釈』 P 五四二参照。

(24) 大日方克己 前掲書(15) P 一三二・一六九、新田一郎 前掲書(16) P 一〇四。

(25) 大日方克己 前掲書(15) P 一一五。

(26) 瞿麦会編、一九八六。

(27) 実際に行事に臨んで詠まれた歌などの非題詠歌は検討対象から除外した。

(28) 『万代集』詞書によれば東三条院四十御賀屏風歌。

(29) 『六百番歌合』「賭射」の歌『古筆と和歌』11、二〇〇八・一。

(30) 「野行幸」考―始原から『六百番歌合』まで『玉藻』42、二〇〇七・三。

(31) 谷知子 前掲論文(30) P 一二一。なお『正治後度百首』にも復古の思想が見られることを、山崎桂子が指摘している。同氏『正治百首の研究』勉誠出版、二〇〇〇、P 四六一。

(32) 谷知子 前掲論文(30) P 一二一。

(33) 天皇家に対する祝意が読み取れるのは、もともと賀意を帯びた歌題である「卯杖」のみ。儀式に臨む天皇の姿は描かれず、儀式の場が内裏であることを示す表現も少ない。天皇家や摂関家とは無縁の私的催しであることが大きく関連していることは言うまでもない。

(34) 五味文彦『書物の中世』みず書房、二〇〇三、P 一三七―一四三。

(35) 例えば、「華筵晋日蘭亭飲、羽爵周年曲洛波」(新撰朗詠集・三月三日・三八・慶滋保胤)は月次屏風詩であるが、東晋の王羲之が三月三日に蘭亭の会を催した故事と、周代の公旦の曲水宴の故事(曲水宴の起源とされる)を詠んでいる。

(36) 題詠と句題詩の詠法の関連については、佐藤道生「平安後期の題詠と句題詩」(同氏編『句題詩研究』慶應義塾大学21世紀COE心の総合的研究センター、二〇〇七)、『為忠家両度百首』における故事・古歌を利用した「まはして詠む」詠法については、拙著(2)(第一篇第二章三)を参照されたい。

(37) 『為忠家両度百首』に関する考察―歌作の問題を中心に―『語文』57、一九九一・一〇、P 一二―一三。

(38) 従来のような行事題の詠み方が『後度百首』に全く見られないわけではないし、顕広(俊成)のように伝統からの明らかな逸脱を避けようとする作者もいる。例えば「闘鶏」題の顕広詠は「さくはなもなくうぐひすもはるはなほとりあはせたるころにも有かな」(六九七)というもので、伝統的な行事題詠の方法である。

平成二十七年八月十八日受付 平成二十七年十一月二十四日受理

いえなが かおり…淑徳大学 人文学部 兼任講師